［特集］

熊本震災と法・政策

平成28年熊本地震　熊大黒髪避難所運営記録集『416』

――私たちがやったこと　未来へ伝えたいこと

熊本大学政策創造研究教育センター特任助教
安部美和

法学セミナー
2017/06/no.749

1　はじめに

2016年４月14日と16日に発生した熊本地震では、震源地となった益城（ましき）町が震度７、熊本大学の位置する熊本市中央区も震度６強を記録した。紹介する冊子がまとめられるきかっけになった避難所は、熊本大学黒髪キャンパスの体育館である。黒髪キャンパス周辺では一人暮らしをする本学学生たちだけではなく、地域住民の多くが大学のグラウンドに避難し、４月30日正午まで避難所生活を送った（本特集38頁参照）。このとき避難所運営にかかわることになった学生たちが定期的に集まり、約２週間の避難所運営を振り返るなかで今後の避難所運営がどうあってほしいかをまとめたものが、記録集『４１６』である。大学生活４年間で、震災を経験する学生は少ないであろう。避難所運営に携わることになる学生は、さらに少ないかもしれない。「もしも同じことが起きても大丈夫なように」「二度と同じ失敗は繰り返さないように」そう願う学生たちの気持ちが詰まった記録集になっている。だからこそ、「こうしておけばよかった」という反省点もすべて盛り込んだ。

2　避難所で試された適応力

避難所のはじまりは、2016年４月14日夜の大きな揺れで、熊本大学黒髪キャンパスの武夫原（ぶふげん）グラウンドに避難者が続々と集まったことによる。４月中旬とはいえ外はまだ寒く、学生たちが自分たちのサークルや部室からブルーシートを持ち寄り避難者に提供している。15日の朝になるころには皆家に帰り始め、グランドに集まった学生たちも、避難者に貸し出したブルーシートを洗い家路についた。16日未明の揺れは14日を上回るもので、水道やガスが停止した。熊本市の指定避難場所になっていたグラウンドには、学生をはじめ近隣住民が集まった。避難所運営に携わることになった学生たちも、当初は避難者としてグラウンドに集まった学生たちである。

避難所として開設をするのか否か、16日未明の体育館にはまだ情報がなかった。朝になって「地域の復興優先」という言葉が伝えられ、避難所運営の体制を整えていったのである。この時点で、体育館には約120名の学生がボランティアとして運営に携わっていた。本部と支援物資置き場、受付はあったものの、いつまで続くかわからない避難所運営の長期戦に備えて、仕事内容の明確化を図った。本部、受付、救護、外国人対応、情報、環境、警備、物資配給の８つの機能を立ち上げ、各リーダーはシフトを組んだ。こうした学生たち主体による避難所運営は４月18日正午に解散し、19日以降は、学内に残った学生、体育館で避難生活をしている被災者に引き継がれた。18日までの学生主体の避難所運営が、その

『４１６――私たちがやったこと 未来へ伝えたいこと 平成28年熊本地震 熊大黒髪避難所運営記録集』

記録集『４１６』14-15頁

後閉鎖までの避難所運営の基盤を作ったことは間違いない。「学生がこれだけ頑張っているのだから」こうした声があちこちから聞かれ、空いている時間に手を貸してくれる方が多くいた。

避難所を立ち上げること、運営をしていくことに際しては多くの問題が次から次に出てきた。しかし、あの混乱した時期に誰もが冷静に行動できるものかと問われれば、答えは「ノー」に違いない。準備不足と言われればそれまでだが、準備した以上のものに対応しなければならないことが多々あった。求められたのは、刻々と変化する状況に対応していく臨機応変さと、物資不足のなかでいかに環境を整備していくかを考え行動していける想像(創造)力だった。

ガムテープで廊下に右側通行の表示を作成したり、段差の場所を目立たせたり、電子レンジと濡れタオルで温湿布を作ったり。受付名簿は、廃棄された用紙の裏紙を活用した。体育館は、倉庫の中まで片づけて保健室や着替えの部屋として使った。使えなくなったシャワー室は、着替えだけでなく授乳室としても利用した。「ない」環境は、みんなで作り出す。こうした工夫も記録集に収められている。

3　避難所運営の真っただ中で届いた声

あらかじめ備えておけば回避できる問題をきちんと整理し、何年後かの後輩に託したい。そのためにも振り返りをきちんとしたい。こうした声は、まだ避難所運営が続いている体育館で届けられた。こんなに大変な思いをしたのだから、その記録を残しておきたい。はじめはそんな動機だった。避難所運営でどうにもならない疲労感と精神的なストレスに耐えていたなか、こうした声をあげ、そして記録集作成まで毎月集まってくれた学生たちには、驚かされるとともに頭が下がる思いでいっぱいである。

振り返りのなかでは、何度もこの記録集が決して大学や行政の対応を非難するものではないことが確認された。彼らが残そうとしたのは、この経験を機に大学が避難所という災害時の被災者のよりどころとなるためには、どのような心構えと準備が大学、

毎月開催された振り返り会

行政、そして避難者に必要であったのか、次に向けて何が必要なのかを考えるきっかけになる記録であった。

記録集の提言にも書かれているが、私たちは避難所運営の大前提として避難所にいる避難者が自分たちで避難所運営をするべきだと考えている。行政職員は地域の復旧に向けてなすべき業務が大量にある。避難所運営に拘束されて、こうした復旧業務に従事できないのは地域にとって不幸である。しかし、だからと言って全く避難所運営にかかわる必要がないというのではない。避難所運営をするためには備蓄も必要であるし、避難所にいる人たちの状況を把握する必要もある。震災の起こる前に避難所になりうる施設に備蓄をしたり、避難所が立ち上がった時には市内を俯瞰して支援物資の状況を確認したり、何より避難者数の推移を把握することには行政の参加が不可欠だろう。避難所、行政、避難所となる施設の管理主体がどのような連携を取ることがベストなのか、それを考えるきっかけになればと思っている。

4 次につながれ

答えのない決断を迫られ、理不尽な言葉に心が折れそうになりながらも、それでも彼らを支えたのは同じ気持ちで避難所運営に当たった多くの仲間たちであり、彼らの支援に精一杯手を貸してくれた体育館の避難者の方たちだった。大学が被災し、学生や職員の安否確認に奔走されるなか、避難所運営の決断を下した大学の英断、出来る限りの要望に応えようと奔走してくれた教職員がいたこと、自らも被災者でありながら住民との板挟みになった行政職員がいたことも事実である。しかし、情報が錯綜するなか、どのような情報を誰に渡せばよいのか、避難所と行政がどのように連携すればよいのか、避難所の運営や閉鎖はどの組織が最終決定を下すのか、現場が混乱したのも事実である。

「あれがあればよかった」、「こうしてほしかった」、「もっとこうすればよかった」。反省すればきりがない。しかし、避難所運営が私たちにとってリアルなものだったからこそ、失敗もあったし、気づきもあった。だからこそ、記録集には良かったことばかりを詰め込むことはしなかった。同じことで後輩たちが悩まなくてもよいように。この記録集には、作成に携わった学生たちの、後輩たちに同じ轍を踏ませたくないという優しさと、今の準備で本当に万全か、と問いかける厳しさが含まれている。

記録集は、第１部が時系列、第２部は各役割で避難所運営をまとめている。第３部には、今回の経験を踏まえて避難所運営がどうあるべきか学生たちからの提言がなされている。震災直後の混乱したなか、どのように黒髪避難所が運営されていったのかを知っていただくとともに、皆さんの地域の避難所でも同様のことが起こるかもしれないという想像をしてみてほしい。そして何が今のうちに準備できるのかを考え、行動に移してもらえれば幸いである。この記録集を皆さんの避難所や備蓄倉庫に置いていただき、皆さんの地域の備えの一助となることで、彼らの経験がつながっていくことを願っている。

記録集の入手方法

記録集は、熊本大学熊本創生推進機構政策創造研究教育センターでお配りしています。数に限りがありますので、ご了承ください。また、ホームページからダウンロードも可能です。下記ホームページにある、「刊行物一覧」から入手ください。

＜問い合わせ先＞

熊本大学熊本創生推進機構政策創造研究教育センター

Tel：096-342-3096

Mail：coc@kumamoto-u.ac.jp

HP：http://coc.kumamoto-u.ac.jp/

（あべ・みわ）